

かっぬま

勝沼のブドウ畑と ワイナリー群の 文化的景観





見てみませんか、見渡すかぎりのブドウ畑を。
聞いてみませんか、吹き抜ける風でブドウの葉がささやく音を。
味わってみませんか、口いっぱい広がるブドウの甘みを。

甲府盆地の東の端っこ。

扇状地や川がつくった起伏のある土地。

まるで迷路のように張り巡らされた水路が、ブドウ畑や家々をつないでいます。

宿場町が花めく頃に始まったブドウは、

文明開化の汽笛とともに日本中へ広がり、

やがてブドウを摘みに、

ワインを愉しみに、

遠くから人びとがやってくるようになりました。

江戸時代から400年ものあいだ、ブドウ畑は勝沼を見守っています。

——そして、その背後には人びとの歴史があります。

か
つ
ね
す

その背後にある自然と暮らし

日本一のぶどう郷



勝沼のブドウ畑と ワイナリー群の 文化的景観



東京都心から特急に揺られて2時間。長いトンネルを抜け、甲府盆地が見えたとき、そこには一面のブドウ畑が——。

勝沼は、江戸時代より甲州街道を通じた往来が盛んな地域で、甲斐国随一の宿場町でした。そのころよりブドウが栽培され、勝沼宿を通じて名声を博しました。明治時代にはワイン醸造も始まり、その後の鉄道の開通は、ブドウやワインの流通に劇的な変化をもたらし、ぶどう郷としての「勝沼」の名を不動のものとししました。戦後のモータリゼーションの発達やレジャー活動の普及のなかで、多くの観光ブドウ園が誕生し、勝沼は観光地にもなっていました。

ブドウ産地としての長い歴史を積み重ねるなかで育まれてきた「勝沼のブドウ畑とワイナリー群の文化的景観」とは、一面のブドウ畑や歴史あるワイナリーに象徴される地域の景観とそれを生み出している地域の人たちの生活やなりわい、さらに、土地や生活を守るために積み重ねてきた活動の歴史のことです。

そうした景観の背後にある勝沼の特徴をここでは3つの見方から考えたいと思います。それは、勝沼らしさであるとともに、未来に受け継ぎたい「地域の誇り」といえるのかもしれませんが。



文化的景観とは

「文化的景観」とは、土地にひとが暮らし、生活や仕事を営むなかで、地域の自然や地形を巧みに利用したことにより生み出されてきた景観のことをいいます。山間や海辺の農山漁村、あるいは町場の商家町など、身近にある何気ない景観すべてが私たちの生活の記憶であり、大切な文化的景観です。

地域固有の自然や文化のなかで育まれてきたこうした景観、さらにそれを形成してきた地域のシステムに価値を見だし、地域で守り、受け継ぐための仕組みが、国の文化財のひとつとしても位置づけられている「文化的景観」なのです。



遊子水荷浦の段畑(愛媛県)
海辺の急峻な段々畑にじゃがいも畑が広がり、半農半漁の営みが続く。



別府の湯けむり・温泉地景観(大分県)
世界一の湧出量ともいわれる温泉資源が、地域にさまざまな生業を生み出している。



姨捨の棚田(長野県)
中世末より形成された棚田には、水路が張り巡らされ、良質な米が生産されている。

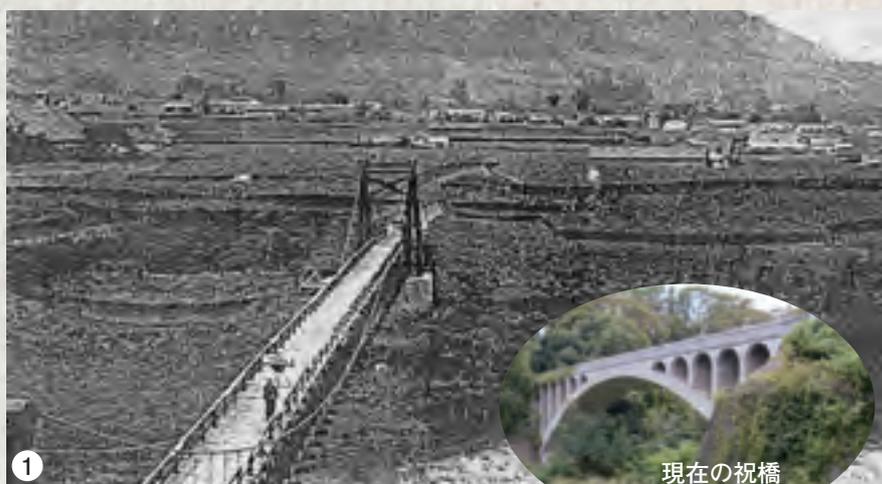


人と物の往来が日本一のぶどう郷を生む。

勝沼ぶどう郷駅と
煉瓦造の大日影トンネル
明治36年(1903)の中央本線開通により、ブドウ・ワインの出荷量は飛躍的に増加した。

江戸時代の旧街道、明治時代のトンネル、戦後のバイパスや高速道路といった交通インフラの整備は、甲府盆地東側の玄関口である勝沼に多くの人や物資をもたらし、勝沼からもブドウやワインが出ていきました。

こうした有利な立地が、勝沼のブドウやワインを全国に広める原動力となったのです。



1

1: 祝橋と祝村(岩崎)の集落・ブドウ畑

写真は2代目の吊り橋。大正2年(1913)の勝沼駅開業の翌年、祝村から日川対岸にある駅へとブドウを出荷するために架橋された。3代目の祝橋は昭和5年(1930)に架けられたものである。

2: 甲州街道と勝沼のシンボル・鳥居平

まるで鳥居平から延びているような甲州街道。鳥居平は、甲州市きつての古刹である柏尾山大善寺の寺領で、平安時代から送り火行事である鳥居焼が行われてきた。

3: 東京との距離を縮めた大日影トンネル

明治36年(1903)の鉄道開通に伴って掘削され、ブドウ等を含め、東京との物流は飛躍的に向上した。



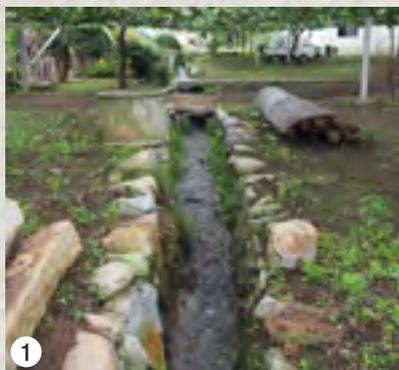
2



3

現在の祝橋
(国登録有形文化財)

扇状地を活かし、賢く、たくましく生きる。



1

1:日川から取水され、縦横に張り巡らされるセギ

セギと呼ばれる水路が地形の高低差を利用して地域全体に張り巡らされている。かつては井戸水とともに、生活用水としてセギの水を利用しており、現在でも農業用水として一部で使われている。

2:河川付近に分布する天然の冷蔵庫「ブドウ冷蔵庫」

長期保存が可能なブドウの品種(甲州種)の出荷時期をずらして価格の安定を図るため、大正から戦前にかけて、半地下や竹林などの日陰、堰の水や地下水などを利用して造られた。

3:ぶどうまつり(雀宮神社例祭)における神輿渡御

ブドウシーズンの終わりを告げるぶどうまつり。その一部として行われる雀宮神社例祭では、観光ブドウ園のぶどう棚の下にも神輿が練り歩く。

4:どんど焼き(小正月行事)でも使われるブドウ枝

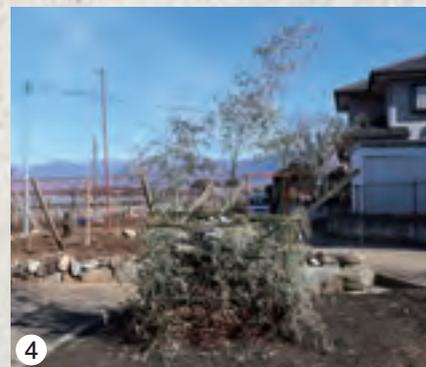
小正月に無病息災を願って行われるどんど焼き。ここでは、ブドウの枝も薪として古札や正月飾りとともに燃やされる(写真下部)。



2



3



4

勝沼では、東と南から流れ出た土砂が堆積した扇状地が折り重なった結果、地形は西面・南面に傾斜しており、水はけの良い土地が一面に広がっています。東西に流れる河川はときに暴れ、河岸段丘を形成し、一帯の地形をより複雑にしています。笹子峠から吹き出す強い風は日川を伝い、扇状地に届きます。

勝沼の人たちは、地形や気象がもたらす環境を受け入れ、巧みに使いこなしながら生活し、また、ブドウ栽培などの生業を営み続けています。

甲州街道勝沼宿の町並み
日川の河岸段丘上に町並みが尾根筋状に伸びる。





遷りゆく時代のなかで、ブドウを育て、ワインを醸す。

ブドウの袋掛け作業

ブドウを日焼けや雨・雹から守るため、親指を固定できる専用のホチキスで一房ずつ袋をかける。

江戸時代に本格化したブドウ栽培。明治時代に始まったワイン醸造。商品作物であるため、栽培・醸造方法や品種は時代の流行や需要とともに日々進化してきました。

しかし、日本一の「ぶどう郷」としての勝沼を支えているのは、日本を代表するブドウ・ワインの産地としての歴史の積み重ね、そしてそれらに対する人びとの自覚であるのです。



1:明治時代の竹製のブドウ棚

永田(甲斐)徳本は、江戸時代初期に、それまで株栽培であったブドウに竹を用いた棚架法を考案したと伝えられる。その後、棚材はコンクリート柱と鉄線に変わり、現在では単管パイプによるものもある。

2:垣根仕立栽培による醸造用ブドウ

西洋から導入された醸造用品種では、近年、粒ごとの糖度を高めるため垣根仕立栽培も行われている。

3:地域に多く遺されている一斗瓶

家の軒先、畑の片隅などあらゆる場所で「一斗瓶」がみられる。それは、農家による個人醸造が盛んであった頃のような今に伝える。





CULTURAL LANDSCAPE OF VINYARDS AND WINARIRS IN KATSUNUMA



写真:急傾斜の畑での「ジベ処理実習」(勝沼中学校)
地域の基幹産業であるブドウ栽培を学ぶため、勝沼の中学生は全員が授業の一環としてジベレリン処理(ブドウの種無し及び肥大化のための作業)を体験する。

平成30年3月1日 初版発行

編集:山梨大学生命環境学部観光まちづくり研究室
甲州市教育委員会文化財課

発行:甲州市教育委員会文化財課
〒404-8501
山梨県甲州市塩山上於首1085番地1
電話 0553 (32) 5076

本冊子は、甲州市・山梨大学共同研究「勝沼のブドウ畑とワイナリー群の文化的景観」価値調査成果をもとに刊行するものである。編集は、甲州市教育委員会と協議のもと、山梨大学生命環境学部観光まちづくり研究室が行い、菊地淑人、岩田美耶、小田切可奈、高橋瑞季が担当した。イラストは岩田美耶によるものである。

文化的景観価値調査(平成28年度～29年度)には、菊地淑人、岩田美耶、小田切可奈、小山亜弥、高橋瑞季(山梨大学生命環境学部)が参加した。